

ビジネスにも就活にも
ひょうご
経済+
プラス

経済

医療産業 関西の環【4】国産機器

2018.08.19



シスメックスに納めるノズルを手にする二九精密機械工業の二九良三社長。試行錯誤を重ねながら8年かけて開発した=京都市南区、同社京都工場



協和から部材の供給を受けるオムロンヘルスケアの血圧計。洗練されたデザインが特長だ=京都府向日市

2017年3月、京都。お鈴など真ちゅう製の仏具製造から始まった二九（ふたく）精密機械工業（京都市南区）が催した創業100周年の宴に、神戸財界を率いる神戸商工会議所会頭の家次恒（68）の姿があった。家次は東証1部上場の検体検査機器大手、シスメックス（神戸市中央区）の会長兼社長。社員約200人の二九精密に、主力製品の性能を左右する部品を頼る。

シスメックスは1968年、神戸の音響機器メーカーTOAの医療機器販売部門が独立し発足した。企業の歴史は二九精密の半分。病気の治療や健康診断に使われる血液分析装置、薬剤を製造し、世界の需要を捉えて急成長した。

造船や鉄鋼など重厚長大の後に続くものづくり産業の育成が喫緊の課題である神戸の経済。生産拠点の海外移転が進む中、すべての機器を加古川市の工場生産し続けるシスメックスが時代をけん引する。

家次は力をこめる。「不可能に挑む二九精密のような中小企業の存在が、メイド・イン・ジャパンの強みを生んでいる」

◇

二九精密の本社工場。社長の二九良三（62）が、シスメックス向けに開発した細身のノズルを天にかざす。直径2ミリ、内径0・6ミリ。形状記憶のチタン合金製で、強い力で湾曲しても、すぐに一直線に復元する。実用まで8年を要した。

血液分析装置は、医療現場から送られた採血容器のゴム栓にノズルを突き刺し、血液を吸い

取って調べる。抜いたノズルを洗浄し、次の容器に突き刺す。これを自動で繰り返す。

刺さり所が悪くて曲がることもあり、従来のステンレス製だと担当者が出向いて交換するため、検査の遅れを招いた。

「曲がっても、元に戻れば装置を止めずに済むんだが…」。2003年、取引のあった二九に新ノズル開発の打診があった。

良三は「断ったらそれまで。乗り越えれば新たな地平が広がる」と引き受けた。得意の削り出しでは作れない細さと構造だった。他社の設備を夜に借り、パイプを伸ばして成形する工程を取り込んだ。さらに、血液成分がこびりつかないように内部を磨き上げる設備を社員が手作りし、搭載にこぎ着けた。家次の期待に良三が呼応する。「困難な仕事にこそ挑み続けたい」

◇

手を結ぶ大手と中小。健康機器メーカーのオムロンヘルスケア（京都府向日市）が17年に売り出した小型血圧計は、プラスチックメーカー協和（大阪府高槻市）の篠山市の工場が本体部品を担う。

ターゲットは40代。高齢者が使うものというイメージを覆す格好良さを追求した。腕に巻くカフと本体を結ぶチューブをなくして一体化させ、テーブルに置いても邪魔にならないデザインを考案。スマートさを強調する光沢を放つボディーが協和製だ。オムロンの担当者は「高い成形技術により、塗装をしなくても鏡のような外観に仕上がった」と満足げに話す。

関西の中小企業が蓄積した分厚い技術が、国産医療機器の躍進を支える。=敬称略=（長尾亮太）